

報復攻撃と触発された置き換え攻撃の比較検討

宮地 建守

人間の歴史は対立・抗争の歴史である(大淵, 1993)。歴史的に見ても人間は戦争を行い、現在でも殺人事件やいじめといったものは日常茶飯事に起こっている。攻撃行動の中には、不快な情動を発散することを目的とする情動発散説がある。この情動発散説の中で代表的な理論として Dollard & Miller(1939)の欲求不満説があり、欲求不満状態時に TDA (triggered displaced aggression) が生じるとされている。TDA つまり触発された置き換え攻撃とは、欲求不満の根源となる者(挑発者)による挑発を受けた後、些細な挑発を行う(誘発者)による挑発を受けた時に、本来挑発者に向けるべき攻撃を誘発者に向けるというものである。

過去の TDA の研究では、TDA のみを測定したものが主流であった(i.e., Pederson, Gonzales & Miller, 2000)。しかし、淡野(2010)にもあるように、現実場面では TDA だけでなく挑発者への報復攻撃を行う機会もあり、TDA のみの測定は生態学的妥当性が不十分と言える。そこで本研究は、挑発者への報復攻撃と誘発者への TDA の両方が測定できる研究を行った。仮説としては、従来の研究どおり「誘発者に対する TDA や不快感認知は挑発がある場合の方が無い場合より高い。」(仮説 1)、また Frost & Holmes(1979)の欲求不満の原因が解消されなければ TDA を行なっても不快感情と攻撃動因がなくなるという考えを支持した「挑発者に対して対処可能な場合、誘発者に対する TDA や不快感認知は低下する。」(仮説 2)を立てた。

本研究の実験デザインとして、従属変数は誘発者への不快感ならびに謝礼金の評定、独立変数は挑発者による挑発(有・無)と評価対象者(挑発者と誘発者・誘発者のみ)とした。誘発者への不快感は 7 件法とし、謝礼金は 0 円以上 1000 円以内で評定してもらった。評価対象者挑発者と誘発者群は実験参加者が挑発者と誘発者の両方に攻撃可能な群であり、評価対象者誘発者のみ群は誘発者のみに対して攻撃可能な群として分けて行うことで前者の群を仮説 2 の検討、後者の群を仮説 1 の検討を可能にした。

結果は、仮説 1 は一部支持され、仮説 2 は支持されなかった。仮説 1 では、従来どおり誘発者への不快感は挑発有群のとき挑発無群と比較して高い傾向にあった。誘発者への TDA は差が見られなかった。この要因として、誘発者の挑発が強かったため挑発者の挑発の有無関わらず差が出なかったと考えられる。仮説 2 が支持されなかった要因として、誘発者の挑発が挑発者の挑発より強かったこと、挑発者の挑発に合理性があり実験参加者が攻撃するには至らなかったことが挙げられる。

本研究では、誘発者への TDA しか出来ない時において挑発者の挑発があることで誘発者に対して不快に思うが TDA を行わないこと(仮説 1)、挑発者への報復攻撃と誘発者への TDA の両方が可能な時にはより誘発者を不快に思い TDA を行うこと(仮説 2)がわかった。しかし、挑発者と誘発者の挑発の力の加減設定が課題といえる。また、今後の展望としては挑発の力加減を改善した上で改めて報復攻撃や TDA などの攻撃行動を複合した検討を行う必要がある。(社会心理学)